

# ミオヤの巻

## 親縁の巻

報身佛……………	一
大ミオヤ……………	三
教のミオヤ……………	五
光明の生活……………	六
親縁……………	八
宗教心の中心……………	三
後篇……………	三
十二光御講話筋書……………	二四

## 報身佛

信仰の對象となるものは此報身佛にして宗教としては是が最大の中心となる本尊である。淨滿といひまた光明遍照と云ふ。

宇宙の最上位に位する金銀ルリ寶石を以て莊嚴せる微妙の莊嚴を極むる處に在まして、無量の相好光明を以て最も麗はしき相好の威徳尊嚴なる人格的の尊體にして、無量の聖者の爲めに圍繞せられて恭敬せらる。諸の信仰者の歸趣する處は此ミオヤの在ます樂しき御許に生くるにあり。

また一方には光明遍照として如來は光明遍なく十方世界を照らして、信仰の衆生を其光明の中に攝めて靈化し給ふ。

經の意を綜合してかやうに信するがよい。例へば太陽は世界を照らして形の上を照らしてすべての動物と植物とを活してをる如く、如來は心の光明が遍なく十方の人

### 前篇

の精神を照らして)

太陽は人の形の方を照らして人を活す恩を與へてをる、如來は一切衆生の心を照らして心靈を開發して清き靈き人として)人は太陽の方に依らざれば此肉體が活くことができぬ如く、人の心靈は如來の光明を被らざれば永遠の生命靈的生活になることができぬ。故に無量光の)

如來は一切の衆生を光明の中に攝めて聖者の)永遠に活し給ふ故無量壽と云ひ、また光明普なく一切衆生の心靈を照らして完全なる靈格にして下さる光明である故に無量光と云ふ。

太陽は照らしつつあるも眼がなくては見えぬ。如來は照らしつつあるも信仰なければ見えぬ。

我が)してをる如來は靈的人格的にして最も萬徳圓滿の最も威神の光明普なく照らし我ら常に其光明の中に在り。

最も尊き如來を念じをる時は尊く辱なく自と恭敬の念を生ず。神と云ひ佛と云ひたとひ數多く在ませども此如來のみ眞實、一切諸佛の本體にして絶對的にかなる神も佛も比類すべきことできぬ。

尊き如來のましますと信す。唯ひとりの尊き威力と慈愛とを有て在ますミオヤありと信す。

釋尊が力を極めて斯如來を恭敬し信仰せよと教へなされし如く、靈なる哉、法身佛が天地萬物の備を以て我ら衆生を活し給ふは無量光如來の光明を以て衆生を永遠の生命、此光明の中に攝取して完全き人に爲んが爲にあり。

## 大ミオヤ

佛敎は哲學であると共に宗教である、是が爲に佛敎は理論としても實に高尚に理が明了の故に學說の上にも満足を感じえらる。然れども夫が爲めにまた哲學方面と宗

教方面とが混じり恐れがある。例へば如來の三身の説に就きては法身を説くは哲學的に見解を立て、法身は法性の理體にして宗教の對象即ち神として慈悲に富める暖温なる人格の尊體を見ずして、唯一の理體となりて哲學的に見解を（ ）また報身に對しては人格的に見て居る、殊に淨土教の報身佛の如きは全く宗教的の對象なる人格的の如來にして如來は大悲願力を以て光明の中に衆生を攝取し念佛する者を取捨てすまた如來は無量の相好功德圓滿にて最圓滿な人格的の尊體を以て衆生に儼臨し給ふ。斯く人生の終局には人格的の如來の慈悲の光明に預からざれば成佛し（難）しと説きながら、一切衆生の生れ來りし根本の法身佛は人格的に見ずして唯一の眞如の理體であると云てをる。衆生根本の説は哲學的にして抽象的の理體が萬物の根本にして人生の終局は人格的の彌陀尊の光明に攝取せられて淨土に往生して乃至成佛すと。

中には（ ）たる佛教の習慣に囚はれて報身を人格的に（ ）と、其の法身佛は絶對人格にして一切萬法の本地、大ミオヤにして、一切萬法の一（ ）法身如來の御力と御恵に依らざるもの無しと云時は、是佛教にあらすして（ ）とは謂ゆる偏見の人なり。是全く哲學と宗教の混じたる因果の然るを覺せずして佛教は爾るものと想へり。是れ誤れるの徒なるを免れず。

### 教のミオヤ

謹んで一大事因縁經の意を案するに、われらが教祖釋尊の御本體は清き上界に在す處の法身無量壽佛である。上界に在りては彌陀法王、地上に分身しては釋迦牟尼佛、彌陀尊は宇宙最高の中心に在りて光明普ねく十方世界を照します大日輪である。喩へば太陽は自分より分身したる地球に對して永恒に光明を注ぎて聖き人格に、淨界の彌陀尊は御自身より地上に分身したる釋尊へ常に光明を注ぎて聖き人格の光として地上の一切衆生を教化し給ふ。若し淨界に彌陀なかりせば地上に釋尊と云ふ人格の光明者出べきなく、釋迦は人格を以て彌陀の光明を現はし給ふ聖者である。

若し釋尊の光明人格を以て彌陀を現はすに非ざれば此地上の衆生に淨界の大光明尊の在ますことを證明せしむることできぬ。

釋尊が地上に出で給ふの所以は偏へにミオヤの實在を示し其大光明の下に一切を攝取して永遠の光明に活かしむる爲である。我等衆生は本法身のミオヤより受けたる靈性有てをるけれども、攝取のミオヤの光明に觸れざれば靈に復活すること能はず。若し人彌陀の光明を被る時は從來の人の子としての無明罪惡（ ）

### 光明の生活

教祖が此世に御出ましなされた處の聖意は一切の人類がミオヤの光在ますを識らず心の間の中に（ ）抵突にしてをる。凭る人々をして秩序ある真理ある光明の生活に入らしむる道を明さんが爲である。

經に世の人類が未だ光明を獲ず闇黒の中に放逸無慚な生活を爲して居る様、何とも遺瀦なく思召して、此闇黒なる五惡五痛の中に一道の光を放ちて光明の生活に引導なされた。光明の生活に入る時はかやうな心の状態となり、また身體の全部にまでも表れて來ることを示し給ふた。

光明の生活の反對の方は闇黒の生活である。人はミオヤの光明に觸れざる間は闇黒の生活であることは免れぬのみでなく、自己闇黒の生活と云ふことさへ自覺せぬ。就ては經について教祖が闇黒の中へ光明を與へ給ひしこと委しくは漸々に述べんも若我此世に出て闇の中にミオヤの光を與へ給ひしかは一切の人類は實に恐るべき闇黒の五惡と五痛との生活を以て未來永く獄火に燒かるる罪の薪を積む人生と爲りてしまふを。

光明の生活に入る時は精神の内面の平和安穩は云ふ迄も無く形の上にてミオヤの慈悲と威神との光明に充ざる時は形體の上に迄凭の如く表現るとの思召にて經に爾時に世尊諸根悦豫し姿色清淨にして光顔巍々たりとの文は正しく之なり。

親縁

如來の心光の三能の中に於て、親縁とは大なる愛、即ち大慈悲の温熱をもて人の宗教的感情を融合し美化するの靈能なり。是物質的には太陽の熱線に比例すべき能力にて、此大慈悲の靈熱に感應する時は人の心情が平和、潤澤、歡喜、妙樂、安穩、恩佩等のすべての心理上に最優なる、美なる、微妙なる、いふべからざる不可思議的感情の状態となる。

譬へば太陽の力能より起す處の温熱ならんか、地球上の有機物は生存し能はざると同じく、大慈悲の靈力によらざれば人の聖き生命は生存すべきものにあらず。大なる愛の光は温和にして、能く靈を生息せしめ、新鮮なる活氣は吾人の聖き息を呼吸せしめたり。我らが聖き糧をつねに三昧により妙味を興へられて聖き生命は保存せらる。

我心は永恒に大なる愛の暖熱によりて、我が心の無限の妙樂と歡喜とは永へに如來の大なる愛の泉より湧けり。いかなる艱難の嶮きも困苦の峻をも失敗の溪谷にも失意の陥坑にも平和にし、處世上に大安慰をすべての時に與へ給へり。

大なる愛の温熱は人の心情を融化してすべての人をして慇懃せしむるすべての畏れと憂悲苦惱とを消滅して安穩と歡喜との幸福を興へたまふ。

愛の大氣に靈醉する時は憤怒、恨戾、妬忌、復讐などのすべての害他的の惡の機能は癡靡して温和同情博愛同喜等のすべての利他的の心情勃起す。此暖温なる光の中に和氣霽々たる家庭の花はいかに麗しく且つ覆しきよ。此大なる愛の熱ほど世の人々に對し我と彼との交りを親密ならしむるものあらじ。若し人一たび此大なる愛の活氣に呼吸せんか、之を離れて靈を害する魔氣の中に生息するに耐へざるなり。吾人は謂ふ、愛なる神との親縁を斷ちて世に長壽を以て生存せよと命せらるるも吾人は愛の靈氣を離れたる肉のみの生活は一日にても耐へざる處なり。また望まざる處なり。

八

九

如來の慈顔は大愛の權化、親縁は如來より衆生に加へ給へる恩寵にして人よりは如來を愛樂する信念をもて之を持す神を愛し神に愛せらるる相愛親和の關係に相互相應する處に宗教的不可思議の神秘靈感なるもの生ず。

如來が一切に超絶したる、最も麗しき、最も勝妙なる、身色相好をもて顯現したまふものは何ぞや。此相好莊嚴は甚大なる愛の權化にあらずや。大慈悲の表明ならずや。之に對する宗教的衝動は靈的情懐とし神の戀愛とし之を崇拜し之を憶念して止まず。靈的衝動は大なる愛の權化と瞬間も離ることを希はざるなり。

世に極端なる利己主義を主張するもの謂へらく、すべての生物は本能的に利己なり。己を愛する外に他を愛するは本能にあらずと。吾人は謂ふ、そはあまり極端なる説にはあらずや。人類には本能がまず／＼發展して一種不思議の感情がありて人の精神の中心に伏在せり。そは我と彼、自と他とを同一視し異身同體の如くまでに利害苦樂を共にするの性能あり。は何ぞや。愛なるものなり。愛なるものは最も強き感情の絲をもて我と彼とを維繫す。普通はこの感情の最も強きものは親と子の間に、また戀人の間に現するものに於てしかりとす。生理の自然に規定せられたる異性の親愛は最親密なり。しかれども客觀的に形を異にしたる親と子、また戀人ととの間に於て見る處のものよりは尙一層深く彼我の親密なる感情の存することは宗教的感、情即ち如來に對する靈の戀愛なるものに於て發見すべし。

斯宗教的の心情が神秘的に神人合一生佛感應し、小我大我の冥合せる如きは人と人との相愛のそれよりはこえて最も親密なり。

衆生が如來を愛樂し奉る感情雲非はるかに憧憬し一心に如來を見まく欲しさに戀念する如きは聖く靈なるものの戀熱が胸を焦す肉我の愛のそれと相似たるなり。然れども肉我の戀愛と靈我の靈戀との大に異なる點は純潔清淨なると神に愛化せられたるものはまた博く衆を愛するに至るとの如きなり。

神を愛するは、いと慈の深き父また愛のふかき母を愛慕する如きあり。そは苦し

一〇

一一

みより救はれ、罪より心靈を甦りし愛化せらるる宗教的衝動より生じ、また戀人のそれに於ける如きの戀愛なり。それは無明と罪障とに隔れたる我いかにして雲井の聖きに憬れ靈態を見欲きの眞情より衝動す。

また最も深く最密なる心情に至つては神の中に己を没し、神の眞我に小我を投げ彼此融合し生佛感應の極致に至つては眞我の外に妄我なく如來の大なる愛に化せられたる外に我なきの感をなす。ここに至つて向上門はつきぬ。吾人が無明のために覆はれて自己眞性の父に別れ大なる愛の表現たる舍那圓滿の月の面を見まくほしきは宛ながら戀人のそれに似たり。

罪の爲に亡びて空しく貧里に苦しみ迷ひて生死にさまよひし相は眞性天真の父母に離れしゆえなれば親に愛慕の情はまた堪へがたし。

吾人は自から如來を愛樂し奉る處より生せる經驗する處の宗教的感情を種々の方面より緒をひきて自己の信に如來の恩寵を繰出さんとす。是親縁が吾人の心情に對する恩寵なりとす。

### 宗教心の中心

宗教的關係の中心眞髓は、精神の中の感情にありとせば感情中に於て我と彼とを全く同一視し、彼と我と一體の觀念たらしむるものは人の感情の愛なるもの此である。世には極端なる利己主義を主張するものありて謂らく一切の生物は本能的に利己である、己を愛するを外にして他を愛するは本能に反すと云ふ。吾人は謂ふ。それは極端なる利己主義である。人類以下の動物は暫らく置いて人類は高等にすゝみたる精神生物には、本能の能く發達したる結果一種不思議の感情が精神中心に存在す。

實は我と彼とを同一視し、他人の苦憂が我苦憂と感じられ、自他をして、異身同體の如くにまで利害苦樂を共鳴し得らるゝものは愛によるものである。故に愛はいと強き感情の糸を以て我と彼との間を維繫つける。

普通此感情の最も強きものは親と子との間に、亦相戀する異性の間に其然るを見ん。生理の自然として愛の最も深きものは母と子との間に現はる。蓋は本と母と子との母が自己より分出したる子に對する愛情は、同愛同喜渾かな血の通ふ愛の感情を以つて兩者を繋つけて居る。亦兩者の間を親密にして水も洩れざる計りに濃にして熱き血の通ふものは異性の相愛する感情に於て見るべきものである。母と子と、また異性相互との愛は生理的肉に宿れる感情より流れ出る感情が現はるゝ心の性能である。尚よりは一層微妙にして深遠にして最も靈妙に高等にして彼と我との親密なる愛の存することは、宗教的感情、神人の關係、即ち人が如來に對する靈の愛なるもの是なり。宗教的精神の中心なる心情に神秘的に神人合一生佛感應し、小我大我の眞合せるより衝動し來る靈愛の如きは肉我の情に於て見る愛の情よりは、いかにそれ高尚なるぞ。

甲は肉體の上に拘りて愛する。乙は心靈の永遠の生命としての愛。然れども凭戀の高尚なる感情は最も高等に進みたる靈性の生活に入つて始めて經驗するを得らる。宗教心の中心人の關係を親密にして彼我一體の觀あらしむるものは宗教の中心眞髓たる心情の愛なるものなり。

### 愛の三位

人の精神の階級を三階に立て、天性と理性と靈性とせば、天性は人類も他の動物と共通せる生理的の自我である。生理的肉我が生命に愛なるものありて生命の價値を爲す如く宗教意識の靈性に於ても靈的生命の價値あらしむるものは神即ち如來に對する愛である。

- 一、母子の愛
- 二、異性に於て例する
- 三、大我小我合一の愛

愛樂又親縁の信仰 一

母子的の親愛

我はたゞ佛にいつかあふひ草心の妻にかけぬ日ぞなし  
信と愛

宗教の中心眞髓は冷靜思索に如來の實在を信認したるも其のみにてはまだ活ける信仰になるに非ず。如來を全く我有として感情的に愛慕憶念、常恒に心の妻に繋りて捨てんと欲するも能はざるに至つて、血肉ある温熱なる生命ある信仰となる。喩へば愛に一の母に二人の子あり、二人共に全く自己の母たることは信じて疑はざるも一は親を愛して忘れず、一は親憶の情なし。如來に對するも亦然り。假令如來を信すれども如來を愛念して常に捨離する能はざる如きは内容の麗はしき信仰と云ふべし。

キリスト既に神と子との愛を説く。曰く愛なきものは神を知らず、神は愛なればなり。其れ神は其生み玉へる獨り子を賜ふほどに世の人を愛し給ふ、こは總て彼を信する者に亡ぶること無くして永生を受けしめんが爲なりと。

又保羅は云へり。假令天使の言を語るとも若し愛なくば鳴る銅や響く鉄の如くなり。山を移す程の諸の信仰ありといへども、もし愛なくば敷ふるに足らぬものなり。

信仰と望と愛との三者の中最も大なるものは愛なりと。宗教にて佛と衆生との關係は最も深い愛樂を以つて結合するものである。

愛の糸を以つて兩者を維繫す。

相互に契い合ふ兩者の間には、情の濃なる糸を以つて繋ぐものは愛である。例へば愛に慈愛の深き母に一の子ありとせよ、若し其の子の病に惱めるに臨みて母の情に於て如何ぞ、母と子と其體は二になり居るも何とも偲びざるの惱みならん。其愛人の憂は我が憂にして彼が喜びは我が喜びである。之を同情と云ふ。若しは親子の間に於てもまた異性間に於ても愛し合ふなかに情の繋がるものは愛あればなり。

若し人眞實に如來を愛するの情にして最深ならばすべてに超えて如來を愛するあら

ば、如來に對する毀譽の如きも悉く我が情に響かざるを得ぬ。

梵網經に若し惡人邪見の人ありて佛法が非法非律など、聞くとときは三百の鎗をもて胸を刺るゝが如くに感するなきは眞の佛子に非ずと。何故に凭麼に感するならんとなれば、佛を信愛することの深い故である。若し人ありて己が缺點を毀傷せらるゝが如まは甘んじて忍ぶべし、己は本より凡夫にして全く勝らるゝは當然なればなり。然れども最も深く愛したてまつる如來を毀傷せらるゝの聲、聞いては實に忍ぶことは能はざるなり。是はすべてに超えて愛し奉りつる如來を毀たるればなり。如來は己が靈の本體現なればなり。實に己が愛する靈體なればなり。

愛は宗教の中心眞髓

如來は一切の愛の本源である。一切の愛は如來の大慈愛の分である。假令いかに如來を信すとも深く愛するにあらざれば眞に如來を我有とするにあらす。如來は無條件の愛を以つて我等を永しへに愛し給ふ。我等は如來をすべてに超えて愛するによつて絶對の美を感じ最高理想を現實にすることを得。如來を愛して、如來を我有として永遠の生命をえらる。若し人が何にか愛する物なくして活るは活る價値なきなり。人は常に愛を充すを以て、眞の幸福を感ず。然るに思想の卑劣なるものは其愛する對象も又卑い。唯肉欲を満す物などのみを愛す。凭る人は人格の卑しき人である。

絶對的に美なる高尚なる如來を愛するものは其思想もまた最高等である。絶對にして永遠なる如來を愛して自己を其中に融かし入れ、宇宙無限の靈と美とを我として愛するものは靈に活くる命である。

母子的關係の愛

宗教的の靈の愛にもまた順序がある。例へば肉體が始め小兒が漸次に發育するに隨つて高等なる美の思想、愛の感情も發達する如くに、靈的の愛の情も亦然り。又小兒が母の胎内から産み出されて初めは眼も視へず耳も聽えぬ、其れが母の哺乳に養はれて眼も視、耳も聽くことが出來得らるゝに隨つて、母と子との相互の愛情が濃かに進み

ゆくが如くに、衆生の心霊が慈愛深き如來との間に母と子との因縁に例すべき情あり。いかに母たりとも産み出すや直ちに可愛さが深きにはあらず常に掬養する程に雙方に暖かな愛情が發達するのである。生れて小兒は物言ふこと能はざれども泣く聲を聞いて母が哺乳を與ふるやうに、衆生口になを稱へ意に佛を念するに、如來の慈愛の法乳自から心霊に感受する爲めに、靈の愛が増長して母子的の靈的心情が發達するに至る。常に如來を讚美し、また聖名もて祈念し、また如來の徳音を聞き信念を養ふ等は皆な靈の哺乳となりて、つひには、大慈愛の親に對しては實に子の母に於けるやうに愛情が増進するものである。

我らは赤子である。如來の大なる慈愛の懷に常に懷擁せられざるにも拘はらずまだ孩兒にて母の慈愛の面を見ることが出来ぬ。これが宗祖の母を戀ふ小兒の如くに、我は唯佛にいつかあふひ草と、常に如來を葵望永しへに心の妻に繋りて忘れられぬ子の情である。

此の靈的戀愛こそ靈の自己を自己の中心から如來大ならんとの原動力である。如來は眞である美である。其最高者に觸れんと欲する我々は益々高きに情れ彌々微に戀ふ猶太の豫言者が「汝が心を傾け汝の魂を盡し、又汝が力を盡して、汝の主なる神を愛すべし」とは宗祖が如來を全力を竭して愛慕する處にある。

如來に靈養せらるゝが故に自己の靈も彌増に靈が増進するに隨つて如來を愛するの情も増々増進す。愛は自己の中心から衝動する真情である。他人より汝常に如來を忘るゝ勿れと命せられて動く力でない。自から忘れんと欲するも禁じ難き靈的衝動である。故に心の妻に繋らぬ寸際もない。

如來を愛慕して瞻まぐ欲しさ靈戀の情禁じ難きも、此世に死して後の世ならで遇ふことのできぬのではない。本より大なるミオヤの慈悲の懷に在る身である。恰も孩子が母の懷に抱かれて居るやうなもの、唯慈悲の育みに心霊の眼が發達すれば、此處が即ち慈悲の懷の裡であることが感じられて来る。大ミオヤの淨土は遙かに隔つとは云

ふものゝ如來の御方より御覽なされば一切の所に在まさぬ處なければ靈の眼開くときは此處で實感するのである。

我らが靈性は永遠生命内殻の中に在りて芽發しかつて居る。頓て益々繁茂し、愛の芽をもつて而して麗はしき花となるべき勢分を準備しつゝあるのである。

母と子の愛

宗祖の本地と仰ぐ處の勢至菩薩が楞嚴經の會に於て數多の佛弟子や菩薩衆と共に世尊の命を被りて、過去無量劫の昔に於て念佛三昧の法を教へられて、其が佛種子となりて竟に念佛三昧發得し、無生忍を悟ると云ふ信仰の花が開きしなれば、頓ては無上菩提の果を結ぶことあらんとの告白的演説をなされた此一章を演べてみやう。

爾時に大勢至法王子が共同倫の五十二の菩薩と共に即ち座より立ちて、世尊の足を頂禮して佛に白して申さく、

我昔恒沙劫の事を憶ふに、佛が世に出なされて無量光と名づく、相繼いで十二の如來が御出ましなされて其最後の佛を起日月光と名けました。彼佛が我に念佛三昧の法を教へなされた。其法とは斯やうである譬へば爰に二人ありて一人は専ら常に憶念して忘れぬ、一人は専ら忘れて毫しも憶はぬ、是く二人が若しは逢ひまた逢へぬ。或は

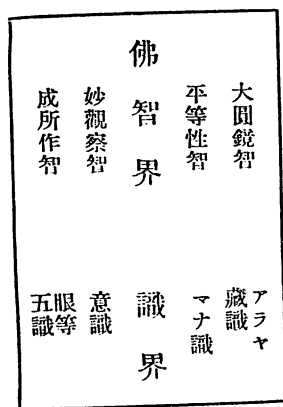
見ると見へぬとあるが、若し二人が相憶ひ合つて二人とも憶念深ければ生より生に至り、形と影との相乖異ぬごとく相似るに至る。實に如來は衆生を憶念すること慈母の一子を憶ふよりは甚だしい。然るに母は何に子を思へども、子の方で逃遁して仕舞へば云何とも致し方がない。若し子の方からも母を憶ふことが母の子を憶ふ如くに母と子とが相憶ひ合つて假令生を歴ても相違はない。衆生が佛を憶ひ念ふて忘れざれば現前にも當來にも必定して佛を見ん。佛を去ること遠からず餘の方便を假りずとも自から心開くことが出来る。

恰も香に染る身に香氣ある如くなる。此を名けて香光莊嚴と云ふ、頓て曰く、我本因地に、念佛心を以つて無生忍に入る、今此界に於て念佛の人を攝して淨土に歸る。

十二光御講話筋書御直筆 (大正九年二月 清水貫相寺に於て)

(一) 無量光 (欠ぐ)

(二) 無邊光



(三) 無碍光 (欠ぐ)

(四) 無對光

終極究竟位  
始本合同

必至滅度願

一生補處願

一、如來性と衆生性との反對

絶對と相待 無限と有限

光明と闇黒との如く

質と量との反對

二、光明攝化の終局

始覺本覺に同ず

菩薩初發心より一生補處に至るの階級新月より十四日夜の月究竟位は満月に

例ふ満月は妙覺位彌陀の光明は日光に比すべく

起信論の報身佛は菩薩業識の所現菩薩の淨業益進むに隨つて客體の報身彌陀大、十地等覺を経て正に妙覺に至る時は彼此の相なきに至る是彼此の對比を絶するを無對となす

聖淨對照

宗教的(客體に重きををく)

無量光

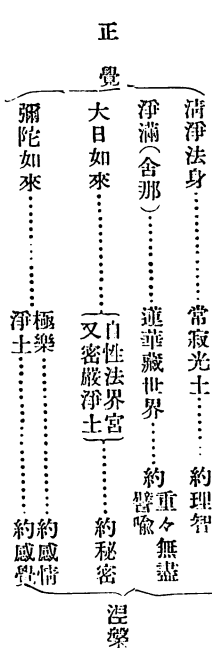
無量壽

哲學的(主體を主とす)

正覺

涅槃

佛身佛土異方面



究竟位四涅槃

一 自性清淨(本覺彌陀無對當位)

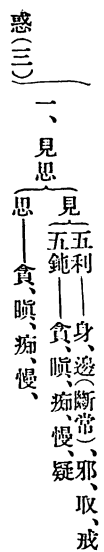
二 有餘依 (依身を有して精神(理想)的極樂)

三 無餘依 (依身を脱して實在的)

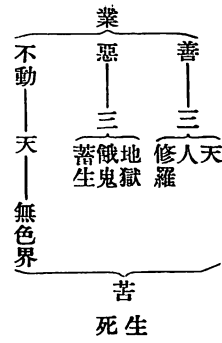
四 無住所 (生死に住せず涅槃に住せず常恒度生)

炎王光

惑等の脱却すべき消極方面



- 二、塵沙(所知障)
- 三、無明



- 業障
- 三障 罪障
- 煩惱障

個人罪——氣質、性癖、習慣、病的惡弊症、遺傳  
共同罪——團隊的(徒黨)罪惡、流行性罪惡、傳染性罪惡等、

宗教的人類三聚

(性起——法界緣起)

- 一、邪定聚(背神的)
- 二、不定聚(劣神的)
- 三、正定聚(協神的)

(依心起想表真容)

宗教心理

淨清光(淨土)	染污	感覺
歡喜光(融化又美化)	苦惱	感情
智慧光(知見啓示)	無明	知力
不斷光(靈化)	罪惡	意志

清淨光

感覺の垢質を脱して六(五)根淨化の作用

一、感覺垢の消極的方面

一、現歷緣對境の塵垢

二、感覺欲 習性 病的

二、五根清淨化

總 諸根清淨八而玲瓏

別(五妙) 眼耳鼻舌身

色聲香味觸

五根淨化の五位

肉 眼、耳、鼻、舌、身、人

天 、 、 、 、 、 、 天

慧 、 、 、 、 、 、 二乘

法 、 、 、 、 、 、 菩薩

佛 、 、 、 、 、 、 佛

五根各五位、 廿五根清淨

根塵十入、 五十根清淨

根塵識十五界、 七十五界清淨

色に五色、(青黃等)聲(五音)香(五味)觸(各五種)三百七十清淨

乃至一切塵數萬物悉く清淨

歡喜光

感情苦惱を解脱し靈的歡喜妙樂を感ず

消極的方面

一、四顛倒を自覺し



二、内外兩魔

三、解脱自力不可能

歸命——如來に接觸せんと感情

如來に融合——靈的入我々入 心情

安立——如來の中に安立 情操

感情美化

一、法悅

二、禪悅

喜 捨

歡喜光裡の五位

歡喜光裡家庭及團隊

人乘

天地自然界中融合

天乘

超絶苦樂、真空真如融合、又遊戯神通樂、涅槃樂

二乘

報佛他受用法樂亦大悲園林遊戯樂

菩薩乘

自受用法樂

佛乘

### 智慧光

智力に對し知見啓示

消極的

無明及見惑等の如來の實在を信認すべき佛知見の障を爲す惑を除くこと

啓示 傳承的 教言方便

親躬的 證得の眞實

積極的

如來出世一大事因縁

三二

衆生佛知見

一、開、如來實在を證すべき初門

感覺的 光明相好依正莊嚴、色聲香味觸

二、示、如來大慈悲智慧等無量内證聖徳の知見

三、悟、如來法身即ち真如に證入す

四、入、如來藏甚深秘密藏に悟入して無量三昧、摠持、神通、智慧等一切佛法藏を開

きて自己の有とす

父の有は即ち子の有との義

人生歸趣、永遠生命無量光の照す中に一切種智を得て正覺を成するに至る

### 不斷光

意志靈化

人の天然の意志は利己主義、世俗情操即ち肉欲我欲を以て自己を支配し五欲亦名利の爲に全生活の希望とす現在我を改造し靈我に更生し人格革新し聖意を意とする靈格を完成するを期す

人格の核

善惡不定

善三 天人修  
惡三 鬼獄 蓄

不定の意向を回轉して彌陀佛國に向ふたる決定意志を願往生心(大菩提心)

一、願作佛心

二、願度生心

三、願與一切衆生安樂國

三四

三三

三五

意志信仰、菩提心(道德心)

道德四動機

他律 社會制裁 利害的他律  
教へられたる他律

自律 自己良心  
高等理想

道德動機及目的

人道 五常

天道 清淨十善

二乘道 三十七道品

菩薩道 六度萬行

佛道

宗教倫理

難思光 喚起位

無稱光 開發位

超日月光 體現位

初發心よりの波羅密の階級

難思光 喚起位

信心喚起因縁



三六

三七

縁 遠——大本願大光明  
近——師友善知識

三心——至心 樂 信  
欲

五行 觀察 禮拜 誦誦  
讚歎供養 稱名

五根 定 念 精進 信  
慧 忍 頂 煥

覺醒 心の瞳 信心喚起 世第一

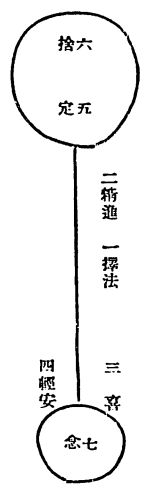
無稱光 開發位

加行位

五力 懺悔 除障

七覺支

一、擇法 二精進、三喜、四輕安、五定、六捨、七念



開發心狀

知見 知力 十信滿位

融會 感情 十住

更生 情操轉換 十行初行

人格革新

超日月光

三八

三九

佛知見 安立

神聖正義 法王子意志  
願作佛心  
願度生心  
與衆生安樂

八正道

正見 正思 正語 正業 正命 正精進 正念 正定

十行  
十金剛  
十地

開發更生有餘涅槃  
爾後光明生活

光明的行爲

下品 靈的人格完成の行程の程度に三品  
中品 光明中  
上品 念佛自ら六度萬行を具す

四〇

四一

昭和五年四月廿五日印刷  
同 廿八日發行  
年七冊制は廢止  
年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成  
發行人 小林七太郎  
東京市小石川區諏訪町五五  
電話小石川一四九五

印刷人 小林七太郎  
東京市小石川區水道端二ノ四四  
電話東京六八五一番

發行所 ミオヤのひかり社  
振替東京六八五一番